

～平成家族物語～舞台芸術によるまちづくりプロジェクト第1弾

『東松山戯曲賞』選評

選定委員：岩崎正裕氏

最終候補作全体に漂うやるせない不安と暗さは、先行き不透明な時代の象徴であろう。

水都サリホさんの「空で千の鈴が鳴る」を推したいと思った。ゴルフ場に現れた宇宙船が不幸せな大勢の幼子連れ去るという。それに纏わる騒動に売れなくなった元アイドルが絡む。一見、軽薄な会話の連続から、後半の祈りに転ずる展開は、現在の世界の有り様を批評的に捉えている。底辺から空を見上げる作者の視線に、ささやかな希望を感じた。受賞作となった緑川有さんの「枇杷の家」は、私には上手く読みこなすことが出来なかった。シェアハウスに住む中高年女性三人の、とりとめのない会話が延々と続く。そのほとんどが恋愛談義。しかし、審査会の議論の中で、劇中の辟易する対話は、毅然としたダラダラなのではないかと思直した。戯曲の生命線は台詞の運びである。他の候補作に、筋立てのために用意された説明的な台詞が多く見受けられたが、ここには筋立てと呼べるものすらない。圧倒的な喋りの洪水がある。もしかすると作者の信念なのではと思えた。しかし、上演を前提に書かれた戯曲であるなら、この膨大な台詞の海を泳ぎきる俳優の技量は半端なものではない。私は上演成立の可否を、勝手に自分の周辺的な事情で判断してしまったのかも知れない。但し、序盤のオレオレ詐欺と刑事の場面はいただけない。取って付けた事件など必要とせず、只々享楽の宴のように突き進む三人の女性が見たいのである。他に、山田裕幸さんの「離陸」は関わりない場所と人物をつなぐ構成力を、辻本久美子さんの「ひまわりは遠く」については、歴史と向き合う丹念な作業からドラマを立ち上げる手腕を、高く評価したい。いずれの作品にも、血縁によらない「家族」のあり方が提起されており、今後の地域コミュニティへの示唆に富んでいた。東松山市という大都市圏でない場所に、新しい戯曲賞が創設されたことを喜ぶたい。